

手をたずさえて

“小原田PRIDE”～自信と誇り

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒

令和4年2月25日(金)発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋



ポジティブにいこう! ～「したい」から「する」に転換～

県立高校前期選抜を受験する3年生達へ、いよいよ勝負の時です。気持ちはポジティブに、「合格したい」から「合格する」に替えるだけでも流れがこちらに向いてくるような気がします。No.47でも書きましたが、『人事を尽くして天命を待つ』という心境が大切です。受験を経験した先輩達からのメッセージです。

- 自分にできると言い聞かせることが大切です。受験は他人より良い成績を取るのがもちろん大事ですが、何よりも自分の心と向き合わない、うまくいかないものです。
- できる限り、いつもどおりのことをした方がいいと思います。新しいことや珍しいことをやろうとすると、当日になってあわてたり忘れたりします。また、持ち物などの事前の準備はしっかりとやっておくと気持ち的にも安心します。
- 緊張するのは当たり前だし、不安になるのもあたり前なので、ネガティブな考えだけは口に出さないようにすること。前日と当日こそ、いつも通りの生活を心がけて、前日は早く寝ることで、体調を万全にする。
- 試験前日・当日は、とにかく今までやってきた自分を信じて、最後までやり切ること。たとえミスをしたとしても、それを引きずらないこと。気持ちの切り替えが大切です。



新型コロナウイルス感染症対策にも細心の注意を払っていきましょう。家庭内においても、こまめな換気や消毒、マスク着用、さらには不要不急の外出を控えるなど、感染症対策を徹底してください。

県読書感想画コンクール 松崎さん“優秀賞”受賞!

令和3年度福島県読書感想画コンクールにおいて、2年松崎結さんが“優秀賞”を受賞しました。きめ細やかに描かれた秀作です。併せて“学校賞”もいただきました。松崎さんのコメントです。

この作品は「風に恋う」という本の高校の吹奏楽部部長の主人公と、かつての部長だった顧問との青春ストーリーを題材にしました。

感想画のタイトルは『その青』です。顧問の演奏中に青い音色を見せつけられた主人公が、今の自分には届かない遠くの色だと感じ、悔しい思いをしたことや、物語の中で訪れるチャペルの色、青春の青が混ざり合って主人公が一番大事にする色になっていくことなどを表現しました。鮮やかで一生懸命さが伝わる色合いになるようにしました。主人公の熱い感情を感じていただければ嬉しいです。



最近、生活が雑になっていませんか?

ある先生がこんなことを話して嘆いていました。「最近、生徒達の気持ちが緩んでいるみたいです。登校時間がギリギリだったり、授業が始まる際のチャイム着席ができなかったりしています。また、委員会活動などの自分の役割を果たさずに、部活動に行ったり帰宅したりしようとする生徒もいます。一部学校のルールを破っている生徒もいます。残念です。」

この時期の緩みは、次のステップに進もうとする際の“足かせ”になります。3ヶ月後の中体連総合大会などにはっきりと影響が出てきます。卒業・進級を目前にした今、自分の生活の中で手を抜いたり、雑になったりしていることはないか、自分自身を見つめ直してほしいと思います。そして、心のひもが緩んでいれば、そのひもの結び目を固く結び直してください。



「風に恋う」を読んで
タイトル『その青』

“真のアスリート魂” ～北京オリンピックを振り返って～

数多くの熱戦が繰り広げられ、我々に多くの感動を与えてくれた北京オリンピックが、カーリング「ロコ・ソラーレ」の銀メダル獲得という快挙とともに幕を閉じました。コロナ渦の中、同じ年度に2度のオリンピックが開催されるという異例の事態でもあり、様々な問題も指摘された今回の大会でしたが、多くの選手の姿は純粋に輝いて見えました。

その中でも、私が最も印象に残ったのは、スピードスケートに出場した小平奈緒選手です。小平選手は4年前の平昌オリンピックでは、金銀2つのメダルを獲得しました。ライバルの韓国の李相花選手との友情も話題になりました。平昌オリンピックの時の言葉です。



ちくま

「金メダルをもらうのは名誉なことです、どういう人生を生きていくかが大事になると思う。メダルという形は周りの皆さんにとって、私が戦ってきた証なので、見ていただきたいという思いが強いです。」

彼女の自己を見つめ、自己を律し、自己の生き方に真剣に向き合い、さらなる高みを目指していこうとする姿勢から、“真のアスリート魂”を感じることができました。その後、小平選手は「どういう人生を生きていくかが大事」という言葉どおりの行動をしっかりと示すことになります。

彼女は2019年秋の台風19号に襲われた故郷長野県に強い思いを抱く中、災害ボランティアに参加したのをきっかけにリンゴ農家との親交を深めています。

千曲川の氾濫と堤防の決壊で、自転車トレーニングのコースでもあった兩岸の家屋は浸水し、収穫最盛期だったリンゴ畑は泥をかぶりました。彼女は変わり果てた光景に胸を痛め、シーズンオフになるとすぐに、1人で軽トラックを運転して現地を訪れました。そして、ゴム手袋をはめてスコップを持ち、農機具から漏れ出た油が染みた畑の土を取り除きました。6月にもトレーニングの合間を縫って、住宅の床板清掃に参加しました。一緒に活動した人は「周囲から『競技に支障が出ないように』と声をかけられたが、本人は手抜きなしで黙々と夕方まで働いていた」と振り返ります。休憩時には、サインや記念撮影にも気さくに応じていたそうです。この話を知った時、オリンピックの金メダリストがここまでやるのか、と驚きました。

小平選手はこう言っています。「長野で生まれ育ち、地域に支えてもらった。応援されるばかりではなく、応援できる人でありたいと思った。」と。

その年の10月からのシーズンは、被災地を励まそうと、リンゴが描かれた赤と白のユニホームでレースに挑みました。浸水地域の農家からリンゴが贈られると、SNSに写真を掲載し、「アップルパワーで頑張ります。」とつぶやきました。リンゴ農家の方は「一番つらいときに寄り添ってもらった。感謝の気持ちを込めて、北京五輪で滑る小平選手を精いっぱい応援したい。」と話していました。

彼女にとって4回目となった北京オリンピックでは、連覇を期待された500mは17位、2大会連続のメダル獲得を目指した1000mは10位でした。レースのあと小平選手は、先月、道で転んだ際に右足首を捻挫していたことを明かしました。直前のケガは致命傷です。

「不格好な姿でごめんなさい。やっぱり間に合わなかったなという思いはあるが、最後の最後まで自分らしさを追求することができた。痛みだとか、やるせなさだとか、しっかり受け止めて向き合えたのが、この北京だった。」と涙をこらえながら話しました。

そして、「ここまで挑戦したことに納得したい。」とも言っています。この言葉は、まさに自分に送った拍手だったと思います。北京オリンピックでの彼女の滑りは思い描いた結果とは違ったかもしれませんが、それでも、自身の生きざまを示した滑りだったと思います。

1000mで金メダルを獲得した高木美帆選手に対して、小平選手はレース後「おめでとう」と声をかけました。高木選手は、小平選手が存在が自分自身を高めてくれたと言っています。互いをリスペクト（尊敬）し合える存在であるということが分かります。何よりも、自分自身は不本意な結果に終わり、悔しさの中にいたはずなのに、勝者の高木選手を讃える姿に心を打たれました。そして、このような北京オリンピックでの彼女の姿やここにたどりつくまでのボランティアなどの行動に、平昌オリンピックの時に感じた以上の“真のアスリート魂”を強く感じるすることができました。



金メダリストの高木選手を
讃える小平選手

ネットニュースによると、小平選手は、自身のSNSで北京オリンピックの現地スタッフやボランティアの人々に対する思いを中国語で記したポストカード画像を投稿したそうです。感謝の気持ちが一文一文字丁寧に直筆でつぶられており、中国メディアはそれを取り上げ称賛の記事を掲載しました。このネットニュースはこのような締めくくられていました。

「金メダルを獲得した平昌五輪でも、ライバルで親友の李相花選手（韓国）との心温まる交流が話題となった小平選手。2大会連続で人柄も金メダルだ。」

